

お不動様と祐天上人

大正大学教授 玉山成元

最近JR線の各駅に、「海と山と緑のいわき市へ」というポスターが目立つ。山紫水明の近代都市いわき市の発展はすばらしい。祐天上人はその中心地平から北へ数キロ、のどかな田園の中で寛永十四年（一六三七）四月八日、新妻重政の長男として生れた。三之助と名づけられ、かわいがられて育ったが、増上寺山内池徳院の住職となった叔父休波上人の影響で江戸にのぼり、出家することになった。休波上人は祐天上人の将来を考え、学徳のそなわった高僧として有名な、袋谷の檀通上人のもとへ預けることになった。ここで祐天という名を授かり修行に入った。

『祐天上人一代記』や『祐天大僧正伝記』によると、祐天上人は物覚えがわるく、お師匠様の教えるお経を覚えることができなかった。本人も努力し、檀通上人も辛抱よく頑張ったが、いつまでたっても変化はみられなかった。仕方なく寺の雑役を命じられたが、自分のふがいなさにあきれた祐天上人は、そっと寺を

ぬけ出し、近くの品海に投身しようとしたところを善長上人に見つけられ、連れもどされた。善長上人はご利益のある増上寺開山聖聰上人の話をし、智慧を授かるように祈ることをすすめた。そこで七日間開山堂に参籠した。すると七日目の真夜中、夢の中に白髪の老僧があらわれ、成田山新勝寺の不動明王に頼めという告があつた。喜んだ祐天上人は、さっそく成田山へ旅立つが、途中でおいほぎに襲われ、お金や衣類まで取られてしまった。しかし決意をまげずに成田山にゆき、不動堂に入って断食行を行った。

二十一日目の満願の夜、長短二振の剣をもったお不動様があらわれ、「頭が良くなるうと思ふなら、この剣を呑んで腹の中の悪い血を出しなさい。どちらを呑むか」とたずねられた。そこで祐天上人は、「どうせ死ぬなら長い剣を呑むと答えると、お不動様は咒文をとなえて長い剣を口の中にさしこんだ。祐天上人は「あつ」といつてうつむきになり、息が絶えてしまった。明け方新勝寺の別当が様子を見に

ゆくと、祐天上人は口から血をはいて倒れていた。お堂には誰も入れないのでこらうなつたのは、お不動様のしたことであらうと思ひ、別当は一心に生きかえることを祈つた。すると血まみれの祐天上人はむっくりと起きあがり、自分はお不動様から智慧を授かつたといつて、今までのできごとを話した。一山の人々は感心し、そのご利益の功德を知りたいといつて、『般若心経』を読んで聞かせると、祐天上人はもとから知つていたように、一字一句まちがわずに読むことができた。一同は誠に不思議なことだといひ、お不動様のご利益に感心したといひ。

この話は、祐天上人の伝記をもちあげるエピソードとしてあまりにも有名であり、あたかも実話のように受けとられている。しかし常識では考えられない。口から長い剣をさしこまれ、血まみれになつた人が、どんなに祈禱しても助かるはずがない。そういう夢なら理解はできる。それにしても不思議なのは、祐天上人の伝記として最も早く作られた享保六年

お不動様と祐天上人

大正大学教授 玉山成元

(一七二一)の『開祖実録』には、成田山の記事がない。また愛弟子祐海上人の伝えたという『祐天大僧正伝』にもこの一件はでてこない。成田山の断食修行が事実であれば、大なり小なり記さないこととはない。しかも長年つきそった親族の祐海上人が、このドラマチックな記事をおとすわけがない。それなのに良質の伝記には皆記していないということは、事実ではなかった証明であろう。

館林善導寺の石川英亮氏は、早く『善導寺と祐天上人』の中で、増上寺第九世貞把上人の伝記の中に、祐天上人の成田山参籠と同一の記事があることをのべ、二人の名前が異なるだけだといっている。記事に出る『三縁山志』は撰門上人が文政二年(一八一九)に書いたものであり、祐天上人時代より百年も後のことである。その中で撰門上人は、すでに祐天上人の記事は誤りであるといっている。これが事実で、成田山の一件は、不動信仰が有名になってからできたものといっている。成田山が有名になるのは、歌舞伎の市

川家との関係もある。ことに二代目団十郎は、元禄十年(一六九七)五月、中村座で『兵根元曾我』を初演し、不動の役で大当りして屋号を成田屋としたほどである。これより早く、祐天上人の教化は評判になり、元禄三年には『死霊解脱物語聞書』が作られ、馬琴の『新累解脱物語』が出ると歌舞伎に取り入れられ、文政六年森田座で上演された『法懸松成田利剣』は「かさね」の基礎となって普及した。こうして江戸時代の後期になると、祐天上人の伝記に歌舞伎の脚本が逆に入りこみ、あたかも昔からあったように成田山の一件が付加されていったのである。しかも祐天上人の名声と愚心祐天という名前は、利剣によって開眼されるに好都合の条件がそろったのではなからうか。いずれにしてもこのことは、成田山にとっても、祐天上人にとっても、大変な宣伝になったことはいままでもない。しかし祐天上人伝が間違っただけで伝えられることは心外である。